

紹介

●彌生式土器圖集 第一輯 森本六爾編

近時において彌生式文化の研究がかなり盛んであるらしいのは、ひとつには東京考古學會の活動によるものと思ふ。この數年來その機關誌「考古學」に華々しく彌生式關係の報告論考を登載し、特にその方面に心を致されたことは顯著である。この圖集の刊行は次ぎに紹介する増刊號「日本原始農業」とともにその活動の一部をなすものである。本輯には彌生式の名が由來する有名な東京本郷彌生町出土の壺を始めとして、各地から出土した二十數個の土器を収め、簡單な説明を附してゐる。菊判、帙入、圖版二〇葉。序集と銘のうつつであるところを見ると、二輯以下は地方別にでも編輯されるのであらうか。ひたすら続刊を俟つ。(東京市澁谷區羽澤町九六、東京考古學會刊、昭和八年七月、二、〇〇)

●日本原始農業 (「考古學」増刊)

東京考古學會編

日本においても漸く古代産業に對する關心がたかまり、その研究には考古學の成果が、時には正しく、時には誤つてまで利用されようとしてゐる時にあたつて、考古學者の側からこの問

題が取上げられたことは、學問の進展のために意義あり、また有益であるといはなければならぬ。また、この數年來、日本の彌生式文化闡明に努力された雑誌「考古學」が、彌生式文化を特徴づける農業の問題を取上げたこともまた極めて自然の道程であらう。しかし、本書はその題が示す如き日本原始農業の全般的な著述ではなく、その論叢である。第一部論考部においてはまづ、森本六爾氏の「彌生式文化と原始農業問題」があつて、總論的に細文文化の捨棄狩獵經濟に對立した彌生式文化の農業を提示し、その普遍的存在、水稻栽培、従つて水田耕作、若干の農具としての石器——鎌としてのいはゆる石庖丁、鋏としての片刃石斧——若干の煮沸・貯藏の壺の形式、その生活の安易と定着性から藝術の發生、大聚落の形成を説き、「今日日本の考古學は生活を離れて單に形式を撫で廻はすことによつて一の行きづまりを示してゐる。吾々は新に生活の土臺の上で、再び形式を撫で廻さうと思ふに過ぎない。又、今後、用途の問題は、明治初年によく行はれた用途論とは全然違つた意味で、大いに論じられなければならない筈である」と結んでゐる。また同氏は「低地性遺蹟と農業」なる一篇において、大和平野を取上げ、その低地にある遺蹟を吟味し、その山間高地のものと對比し、低地遺蹟のより彌生式的、より農業的、しかもより早期の彌生式なるを論ずる。直良信夫氏は「日本新石器時代家畜としての馬牛犬に就いて」と題し、馬牛犬の骨は石器時代遺蹟からも出土し家畜としての存在が充分考へられるが、確實には證明されてゐ

獻に見えぬこと、うちに釭の銘をもつ器のあること、釭・杵・盃は同字で漢代の文獻にあらはれてゐることなどの理由から、漢人の盃にあたるものと論断されたのは、往年『寶籙樓彝器圖錄』その他『博古圖』以來の彝・敦の稱を正して盃と、改められたのにも相比すべき重大な提案である。殊に「苟も器上に名があるのでなければ、それが何の器であるかは遽かに断定がでない」といふ氏の態度を見るに及んで、何人もその提案の確固不拔たるを思ふであらう。しかし、果してさうであらうか。たつたひとつの洗に盃とあるからといって、多少形においても相異を含む夥しい洗全體に、さらに時代を遡つて漢以前のものにも、その名を擴張されたのは果して妥當であらうか。また、然らば儀禮・禮記に見える洗とほどの器を當つべきであらうか。洗は漢に至つてその迹を絶つたとはいへない。「漢禮器制度」(儀禮、士冠禮、賈疏所引)に「洗之所用、士用斝、大夫用銅、……」とある。したがつて、それほどの器に當つべきであらうか。用途が共通點あり、しかもその形のわかつてゐない洗が一方にありとすれば釭の稱呼をかくまで擴張することには難點があると思ふ。また文獻の時代といふものに氏の如く重點をおけば、漢人の盃は盃の類であり、食器であり、飯器である。かういはれる場合にはこの器の如く割合大形なこと、しかも漢式のものにはその内底に文様特に魚形が屢々あらはれることが盃としてふさはしくなくなるだらう。

要するに、器物の名稱の如く極めて簡單なものといへども、その時代もちがひ用途も廣く、名を負ふ所以も多岐であるから、いま偶然の選擇によつて遺つてゐる區々な記事や遺物によつて、その名稱を攷定せんとすれば、器銘のほかに文獻の形の記載や用途の記載とその形の適不適、その記録との同時代性や後代の用途・名稱、器物相互の關係といふやうなもの、總和のうちにもその名稱が考慮せらるべきでそのうちのひとつの點を強調して、他の點を顧ないといふやうなことはゆるされぬ。かくして得られる古器物名稱の體系といふものはかなり複雑なものであつてひとつの名があるからとて直ちに他の名稱を排除し得る如きものではない。容氏の篋の説に就いても、その銘字の判讀は正しいと認められながら、しかも一般にその新稱が行ばれないのはかういふところに起因してゐると思ふ。もし、古器物學者、乃至一部の考古學者や文獻學者にして、しかく簡單な名稱をもつて古人の名稱を復原し得ると豫想してゐるものありとすれば、少しく翻つて現今われわれが使用してゐる器名の若干を反省して見るがよいと思ふ。(この盃といふ新名は『頌齋吉金圖錄』で主張され、しかも日付の遅れてゐる『武英殿彝器圖錄』にはやはり洗となつてゐるのほどういふわけか。)

とにかく器物の正名は物を分離しようとする態度となり、靜的な考察に陥り易い。支那のいはゆる古器物學即ち正名の學は既に或程度まで到達すべきところに到達してゐると思ふ、この上は器形を發生的な見地から觀察すること、そして遂には様式

論にまで進展しなければならぬ。

なほ一々の名稱については啓發されるところも多くまたその當否にはおのづから異論もあらう。しかし、いまは古器物學に造詣深く、しかも武英殿の古銅器を親しく調査された容庚氏の圖録として尊重すべく、また従來に見ぬ程その文様複製に留意されたことによつて本書の價值は更に大である。たゞコロタイプがあまり精巧でないのは、やむを得ないとはいへ、本書の爲めに深く惜しまれるところである。なほ前書には唐蘭氏の序あり、古文獻によつて銅器を論じ、後書には劉節氏の序ありて、圖録類の發達を述べてゐる。(前書、一帙一本、民國二十二年九月刊。後者、一帙二本、二十三年二月)。

●高昌陶集

黃文弼著

西北科學考查團叢刊之一

スワン・ヘディン氏を主班とするいはゆる西北科學考查團の成果のひとつとして、既に黒文弼氏の『高昌磚集』が公にされてゐたが、いままた同氏の『高昌陶集』が世に現れた。高昌國の交河城、即ち土魯番の西、雅爾薩の古墳墓から得られた土器の研究であつて、まづ古墳墓發掘報告、古塚中遺物圖說、陶器之研究の三部に分かれてゐる。城址の發掘にあたり甘肅式の彩文土器片を得、溝北では土人から有耳彩文壺を得たのを端緒として、赤色磨研土器、石斧、銅環、骨鏃、骨鏃を出土した一群の長方形の堅穴式墳墓を發掘、溝西溝南においては高昌から初唐にかけて夥しき墳墓を發掘した。それは一姓毎に墳墓があり、

そのうちに幾多の古墳があり、各墳墓は土中に部屋を掘つた美道式の地下墓で夫婦の合葬が見られる。遺物は彩繪陶器と若干の銅管銅釵と墓表がある。墓表の示すところによれば、六世紀七世紀にわたるが、遺物に變化は認められぬ。たゞ唐の勢力が及んでからは墓誌をまれ、泥塑偶像を埋葬することになつたといふ。溝北のものは溝西溝南のものに比して一段と古く、羅布淖爾漢代遺址の銅鏃、有把漆杯及び獸環に關係あり、その土器は博斯騰淖爾鹽湖の漢墓の土器と一致し、また焉耆の阿拉發溝及び博斯騰淖爾に同種の土器あり、いはゆる輪臺故城址には彩文土器あり、もつてその時代の西紀前一二世紀のもので、いくら古くても前五世紀を出でないことが知られるといふ。

外來の考古學は支那の遺物研究にも影響を及ぼし、いはゆる古器物學の誕生を促したが、結局それも古器物の正名に終始し、行きつまりの状態にある。しかるに、それとは別に發掘に伴つて考古學は漸くその本來の面目のまゝに採用せられつゝあることは支那考古學の爲めに慶賀すべきことであらう。この報告書においても、いくらか古器物學的の正名があるが、しかし、本筋は美事に形式的に處理報告されてゐるのは欣快の至である。たゞ本書においていくらか憾みとするところは彩文の赤色土器と無彩の赤色土器との伴出關係が不明瞭である點と漢代の一證として擧げられた銅鏃が説くところの如く獸環とは見えぬことである。また溝北の遊辨意匠の盃を輕視されたが、私にいわせればむしろそれは赤色磨研土器の最末を示すものでなからうか。

即ちこれによつて、溝北の墳墓の示す文化は漢代から高昌國の直前にまで及んだ様式と見ることが、この發掘の關する限り自然ではないかと思ふ。(一帙二本、民國二十二年、西北科學考查團理事會刊)(水野)

●唐代長安に關する近業三種

東洋文化史上、燦然たる光世を放つて居るのは蓋し唐代の文化であらう。唐代文化は、鄧長安に依つて代表される。されば、長安の研究は、所詮唐代理解の正道であらう。最近學界に發表された長安關係の業績も、此の意味に於て多大なる意味を持つ。此處に所謂近業三種とは、一、足立嘉六氏の長安史蹟の研究、二、民國向達氏の唐代長安與西城文明、及び三、塚本善隆氏の唐中期以來の長安功德使がそれである。その論ずる所、必しも唐代に限らず、究めんとする所亦長安そのものに止まるのではないが、題目に示めず如く、何れも長安と密接なる關係に於いて考察されたものである。以下序を追ふて簡単に紹介する。

一、足立氏は、明治三十九以來、四ヶ年、親しく西安にあつて、教務の傍ら、漢唐長安の研究に志し、實地の踏査と文獻の研討を行ひ、爾來二十餘年、遂に成果を得たものである。其の書の内容を見るに、卷頭に那波學士の序文、及び著者の小引が掲げられ、序説には西安紀行を記し、第一章は關中の地勢、氣候及び長安の沿革を略述し、第二章に於ては漢唐の尺度里程を考究して居る。其の考究方法は、兩代の古錢中、記錄に直径の明記されたものを選び、これを測定することに依つて、我が

曲尺との比率を求め、其の結果、漢の一尺は曲尺七寸六分、唐の大尺は一尺、小尺は八寸三分三厘とした。更に里程を求め、唐代に於ては三百六十歩一里の大程と、三百歩一里の小程とがあり、東西兩都の城坊の制は丈大尺大程が使用されたことを論じた。次章以下第六章までは、周秦の遺蹟、漢の長安城及び其の諸陵、特に後者に就いては、其の形式を考へ、一々現狀を記し、合せて其の記錄を掲げて居る。更に逍遙園に及び、羅什の舍利塔のに就いて述べて居る。第七章は、最も力を注げる隋唐長安城の研究である。但し長安城は大興城の規模によつて修築完成したもので、その大體に於ては變更する所がない故、隋代のことには就いては殆ど全く筆を費さず、専ら唐代のことのみ記して居る。先づ、文獻に依つて、宮城皇城坊街兩市等の構成圖を作り、更に現存の兩壁、大小雁塔等、確實な唐代の遺蹟を選定實測し、兩者を比較研究し、文獻の確實さと、さきに考究せる尺度の結果を使用し其誤差の僅少さとを強調して居る。第八章以下第十二章までは、長安及び其の附近の名蹟に就いて記し、宮殿道觀佛寺、其の他當時前後して將來された諸教に就いても述べて居る。特に景教に關しては記す所や、詳しいが、其の景教流行中國碑の天啓五年長安出土説は猶一應考究すべき餘地があらう。第十二章は唐代の陵墓、其の制度、實況を述べて居る。漢唐諸陵の位置を比較して、扇面に例へ、兩朝國力の發展を暗示する等、啓蒙せらるゝ點が多い。最後の章は長安の碑林に就いて説明して居る。本文に數葉の寫眞圖録が挿入されてゐるが、別冊。